

お見合い相手は無愛想な警察官僚でした  
～誤解まみれの溺愛婚～

## プロローグ

想像してみてほしい。

終電、ほろ酔い状態で、背が高くてコワモテ、っていうかガタイがいい男の人にぶつかってしまった、という状況を。ヒールでその人の足を踏んで、あまつさえ白いシャツに口紅なんかつけてしまったって状況を。……やってしまった。

新入社員歓迎会（歓迎する側）のアルコールでフワフワになった私にできたのは、とにかく何度も頭を下げることだけで――

「……いえ」

男の人は、ほんとに無愛想にそれだけ言っただけで目を伏せた。だから私は、逃げるように家路を急いで歩き出して……ふと気がつく。

――あ、れ。誰か付いてきて、る？ 街灯はあるけれど、ほとんど真っ暗。深夜の住宅街、当然人通りもまったくなくて。急ぐ私と、背後からの足音。明らかにそれは男の人のもので、……しかも、私の歩くスピードに合わせて歩いている、気がする。私はあえぐように息をしながら歩く。冷や汗が出て、足がもつれそうになるのに、アルコールは醒めてくれない。なんとかマンションにた

どり着くけれど、エントランスに入ってホッとする間もなくその足音も自動ドアを潜<sup>くぐ</sup>ってくる。  
（やだ……っ）

マンションの中、エントランスからエレベーターへ向かう自動ドアのオートロック解除は鍵でしなきゃなんだけど、慌てて震えて鍵が鍵穴に入らない。慌てすぎてめちゃくちゃに指先が震える。そうこうしている間に背後から鍵穴に鍵を入れたのは……私が不審者扱いしていたその人で。——あ、れ？

「失礼」

振り向くと、コワモテでガタイが良くて無愛想な——シャツに口紅をべったり付けた、さっきの男の人。があつと開く自動ドア。

「君」

男の人は、私を見下ろしながら言った。とつても無愛想に。

「そんな風になるのなら、酒は控えたほうがいいんじゃないか」

「……えっと」

「では」

颯爽と自動ドアの向こうに消える、男の人。……っというか。ふ、不審者じゃなかった……

足音が付いてきている気がしたのは当たり前だ。だって同じマンションの住人だったんだもの！私。ものすごく失礼なことをしてしまったのではないでしょうか——？

一人でさあつと青くなる。

須賀川美保<sup>すががわみほ</sup>、もうすぐ二十七歳。私、とんでもない失態をしてしまったような気がします……

## 1 お見合い話

「そんなわけでものごく、気まずくて」

「つうか、そんなに頭まわんねー状態ならタクシー使えよ危ねーな」

「それすら思いつかないくらい酔ってて」

昼休み。会社の食堂で、私は男友達——もとい、元カレの小野<sup>おの</sup>さんにそんな話をしていた。元カレではあるんだけど、お互い恋愛感情がなくなつて、それでも仲良くて円満に別れた感じ。

「まあそれでね、お詫<sup>わが</sup>びの品なんかを持って待ち伏せしたい訳んだけど」

「お前のほうが不審者になつてない？」

「でも部屋番号もわからないし。せめてクリーニング代くらいは……」

「相変わらず律儀<sup>りちぎ</sup>な奴だな……あ、そういえば、美保」

なに？ と私は首を傾げた。

「五月五日にさ、皆でバーベキューしようつて話、出てるんだけど」

「こどもの日？ ……あ、その日ダメだ。お見合い」

「……は？ 見合い？」

私のその言葉に、小野くんがそう呟く——少し呆然として。私は首を傾げた。

「うん。婚活しよっかなー、って思ってたらお父さんがお見合い持ってきてくれたの。お父さんの部下の部下」

「……お前の親父サント、確か警察の偉いサンだったよな」

私は頷く。どうも偉いらしい。ときどき国会とかにも出ているとか、いないとか……

ていうか、私だけなんだよなあ。ウチの家族……どころか、一族で「普通」なのって。揃いも揃って、超エリート。劣等感がない、といえば嘘になるけれど……

「なんかもう恋愛とかドキドキとか良くわからないし、お見合いでいいかなーって」

「……結婚が決まったわけじゃないんだよな？」

「うん、まあ。それは会ってみてからかな」

急に、小野くんは無言になる。そのまましばらく無言でお互い食べて、もういい加減食べ終わろうつとときに、小野くんは「誰でもいいならオレでも良くない？」と私を見つめた。

「ん？ でも小野くんさ、付き合ってた四年のうち最後半年、キスもなかったよ」

「それは」

「それどころか手すら繋がなかったし」

「うっ」

「小野くんは普通に恋愛できる人だと思うから、恋愛結婚で幸せになってください」

「オレは」

小野くんが何か言いかけたそのとき、私は名前を呼ばれる。

「須賀川、午後までの書類どうした？」

「ひゃあ忘れてたっ、小野くん、バーベキューお誘いありがと！」

私は慌てて立ち上がる。小野くんは「おう」と答えて、私は笑って席を立った。

その日の帰り途、私はデパートでタオルを買った。それからクリーニング代を一応封筒に入れて、マンションのエントランスでまぢぶせる。エレベーター前には簡単な応接セットみたいなのが置いてあるので、そのソファで本を読みながら待つ。……ほんとに不審者みたいだけれど、仕方ない、よね。ここの住人だろう、ってことしか知らないだし。

時計の針はどんどん進む。通りすぎる住人の皆さんは少し不審そうにしながら私の前を通り過ぎていく。

ちらり、とスマホの時計に目をやった。そういえば、昨日も飲んだ風じゃないのに終電だった。激務のヒトなのかも。……よし、終電時間まで粘ろう。そう思ってるうちに、ちよっと眠気が襲ってきた。うと、うと、としてしまう。起きなきゃ起きなきゃ、と思ってるうちにどろりとした睡魔に私は襲われてしまった。あー、ダメだ。待ち伏せなきゃ、なのに……

「きみ」

聞き覚えのある声が出て、はっと目を開けた。目の前に、昨日の人が立っている。

「何をしている」

なぜか思い切り不機嫌そうだ。コワモテでガタイいい人に、そんな不機嫌そうに言われると余計怖いんですが……

「あ、その、これっ」

私は立ち上がり、デパートの紙袋を押し付けるように差し出す。

「クリーニング代も入ってます。昨日は、……申し訳ありませんでした。あの、お怪我とか」

「いや、それは問題ないのだが」

男の人は、少し戸惑ったように紙袋を受け取ってくれた。そんな顔は、意外に幼く感じた。

「すまない、そんなつもりでは」

「いえ、私の気が済みませんから！」

「……では」

頷いてくれて、私は少し安心する。

「……ひとついいだろうか」

「なんででしょうか？」

「こんな所で眠らないほうがいい」

「……はあ」

「それだけだ」

男の人は踵を返す。ぼけーっとしているとエレベーターが到着していて……「乗らないのか？」と不思議そうに聞かれた。

「の、乗ります」

机の上の文庫本を掴んで、慌ててエレベーターに乗り込む。お互い会話は無い。光るボタンは「七」と「十二」で、私は七階だ。

「……その本」

男の人が、ふと口を開く。

「宮沢賢治、好きなのか」

「え？ ああ、これですか」

私は本を軽く示す。

「好きです」

にっこり笑って見上げると、なんだか視線をそらされた。子供っぽい、とか思われたかな。たしかに童話のイメージがあるけれど、大人が読んでも絶対に楽しい作品ばかりなのに、と私は思う。ちん、とエレベーターが七階に着いて、私は会釈してエレベーターから降りる。振り向いてエレベーターを見ると、男の人は「俺も」と小さく言った。

「宮沢賢治は、好きだ」

意外すぎる！ 剣豪小説とかばっか読んでそうな顔つきなのに。

「あの」

言いかけた言葉は、エレベーターの扉に遮られた。

ちよっとだけ、——ちよっとだけ……もう少し話してみたかったな、なんて思ってしまった。

その日の帰り、終電……とは言わないまでも、また私は遅くなってしまうていた。今日は仕事。コッコツ、とヒールをご機嫌に鳴らしながら、私はコンビニの袋（チー鯉入り）を片手に、冷蔵庫に入っているビール（ただし、第三種）たちを想像していた。街路樹の桜の花は散りかけだけれど、まだまだ頑張ってる。街灯に照らされて、ふんわりと光るみたいで綺麗。

ふと、背後に人の気配がしたような気がして振り向く。少し離れたところに男の人……

大丈夫、と私は前を向いて足を進めた。そうそう不審者なんかいない。どうせまた同じ方向に家があるだけの人だろう。本当にあの人には悪いことをしてしまった。

……なんとなく、思い出す。険しそうで、でも柔らかな目線……

そのときだった。背後から無理やりに抱きつかれる。耳もとに、荒くて熱い息。

「こ、殺されたくなければ言うことを聞け」

なにが起きたかわからなくて、どうしていいかわからなくて、私はもがく。けれど恐怖で声が出ない。さげびたいのに、震えて力が入らない……。こ、わい！

——誰か助けて！

そう、祈るように心で叫んだときだった。

「なにをしている」

低い声とともに、私に抱きついていていた男が勢いよく引き離された。そのまま、アスファルトの地面に叩きつけられる。私はへたりと座り込んだ。男を押さえ込んでるのは、……同じマンシヨンの、例の無愛想なひと。

「……怪我は」

ありません、と小さく小さく呟いた。ぼろり、と涙が溢れる。私は胸を押さえて嗚咽した。こ、怖かった。怖かった。怖かったよ……

男の人がスマホで電話をして、じきに警察が駆けつけてくれる。

「鮫川署長！ お怪我はっ」

「俺は被害者ではない」

駆けつけたお巡りさんの言葉にも、男の人——鮫川さん？ の言葉にも色々びつくりした。鮫川さんは、まだ三十過ぎくらいに見える。それで署長ってことは、国家公務員一種、総合職——いわゆる官僚、つまり……キャリア？ てことは——お父さんと知り合いかも。

ぼんやりとそんなことを考えたのは、きつと一種の現実逃避だったんだろう。あまりにも嫌で、触れられたところがおぞましい、くらいで。鮫川さんの言葉にハツとしたお巡りさんが、私に近づきけれど、私は思わずびくりと身体を固めてしまう。……ちよつと、男の人、嫌だった。

……お風呂入りたい。熱いシャワー、お気に入りのボディソープ、ううんそんなんじゃないなくていい、石鹸で洗えたら、それで。とにかく気持ち悪かった。

「……大丈夫か」

座り込む私の前に、しゃがみこむ大きな影。鮫川さん。私はゆるゆると顔を上げる。鮫川さんは少し考えたあと、私にスーツのジャケットをかけてくれた。ぱつと彼を見上げる。

「ああ、嫌だっただろうか、すまない」

夜はまだ少し冷えるから、と彼は呟いた。

「すぐに女性警官を」

「あ、あの」

私は首を横に振った。正直、今は男の人、嫌なただけれど——この人は、なんだか、ヤじゃない、みたい。

「だいじょぶ、です」

「……現行犯だ、無理に話を聞く必要はないだろう」

鮫川さんは立ち上がりながら、側にいたお巡りさんに言う。

「彼女は俺が自宅まで送ろう。……知人だ」

お巡りさんは頷いた。私がぼけつとそれを眺めていると、鮫川さんはもう一度私の前にしゃがみこむ。今度は片膝立ちで。

「立てるか」

「あ、はい」

答えて立ち上がろうとしたはいいものの、ふらりと傾ぐ身体。それを支えてくれたのは、誰であろう鮫川さんだった。

「あ、す、すみませ……」

「構わない。……あんな後だ」

軽くひそめられる眉。

「すまなかつた」

「え？ 何がですか」

むしろ、助けてもらったのに。

「あと少し早く歩いていたら、犯人があなたに触れる前に確保できた」

そんなのは結果論だ。私は首を横に振った。

「そんなことないです。助かりました。ありがとうございます」

支えられながら、不恰好だけれど、頭を下げた。

「鮫川さんがいらつしやらなければ、私、どうなっていたか」

言いながら、またゾクリと悪寒おんかんが走った。震えだした私に、鮫川さんは「失礼」と小さく言った、かと思うとフワリと抱き上げられる。

「え、あ、あの!？」

「嫌ならば他の方法を考えるが」

「あ、そんなことは、ないのですが」

すたすた、と鮫川さんは私をお姫様抱っこしたままマンション方面に歩き出す。ちよつと赤面して周りを見渡すけれど、暗い夜道にパトカーが数台、お巡りさんは敬礼して見送ってくれているだ

けで、驚いている様子はない。

ま、まあお仕事？ だもんね。特別なことじゃないのかもしれない、なんて思って、同時にちよつとがっかりした。ん？ ……なんで私、ガツカリしてるんだろう？

鮫川さんは私をマンションの部屋の前まで送ってくれた。

「ほ、本当にありがとうございます」

「もう歩けるのか」

「あ、はい、多分」

言いながら下ろしてもらおう。少し震えたけれど、歩けた。部屋に入ればなんとかなるだろう。

「あの、ジャケット」

クリーニングとかしたほうがいいのか、と迷っていると何も言われずに回収された。いいのかな…。鍵を取りだして、何度もお礼を言いながら部屋に入る。ぱたりと閉まるドア。

暗い部屋。私は玄関先で、また小さく震えてしまう。

——だ、れかいたら、どうしよう……

そんな想像が止まらない。そんなはずなのに。ないはず、なのに！ 背中がドアに張り付いたみたいに、私は動けなくなる。そのまま、どれくらい経っただろう。ぴんぽん、とインターフォンが鳴り響く。私はぎくりと肩を揺らした。ドアスコープから、そつと廊下を覗く。そこにいたのは、鮫川さんだった。まだスーツだった。すぐに扉を開けると、少し驚いたような顔をして、私を見つめた。「顔色が悪い」

「……そうでしょうか」

「いや、大丈夫かと思って」

ああいうのは後で反動が、という鮫川さんに私は抱きつく。

不安で、仕方なかった。誰かに——鮫川さんに、縋りたかった。

「どうした？ まだフラつきが」

「違います、その、あの」

私はぐるぐるする頭で考えた。部屋に一人でいるのが、怖い。

「……あの、一晚、ウチに泊まってもらえませんか」

驚いたような鮫川さんの顔を見上げながら、私は「ああ、この人こんな顔もするんだなあ」なんて思って、ほんの少しだけ安心できたのだった。

### 3 ジェットコースター

あの不審者騒ぎから、ひと月ほど経ったある日。

私は深緑の振袖ふりそでで、なんと言いますか、固まってしまっておりました。

五月のさわやかな空の下、かこーん、と鹿威ししこしが鳴る。目の前の男の人は、なにも言わずただお茶を飲んでいた。



『まあ、ここは若い人たちで』

なんて言葉（古典的に使い古されてる！）残して、ウチの父親とお相手のお母様、お仲人（なこうど）さんは去っていった。都内の高級な部類に入るであろう、そのホテル。一階に入っているこれまた高級な和食レストランの個室で、私は黙って緑茶を見つめている。……あ、茶柱だ。ちょっと嬉しい。少しにこり、と頬が緩んだのを見て、その人……鮫川（しやうけん）修平（しゅうへい）さんはようやく口を開いた。

『何かあったのか』

いいえ、と私は微笑む。だって——まさかすぎる展開だ。私が不審者と間違った、例の人。私を不審者から助けてくれた、例の人、鮫川（しやうけん）さんが、お見合い相手だなんて……！

結局、あのあと——不審者騒ぎのあと、本当に鮫川（しやうけん）さんは部屋にひと晩いてくれた。ソファで眠ってくれて（まだ部屋にあった小野くんのスウェットを着てもらった）翌朝出勤していつて——せめてものお礼に、朝食は振る舞ったけれど、あんまりお礼になつてなかつたような気がする。

まあとにかく、そんな鮫川（しやうけん）さんがお見合い相手、とは……。驚きです、と私は緑茶に口をつけた。美味しい。ついほっこりしてしまう。

（釣書も写真も見なかつたからなあ）

なんでつて、別にそんなのどうでも良かったのだ。お父さん関係——つまり警察庁に勤めてるヒトなら、まあ大体問題ないヒトだろうし、つてのが一つ。で、お父さんはお相手のことを「男前だ！イケメンだぞー」と（なぜか自慢げに）言つた。それは大げさだとしても、そこそこカッコイイのかな、なら当日のお楽しみにしておこう、なんて思つてたのが二つめ。

『……恋人がいるのかと思つていた。服を貸してくれたので』

『あ、ああ、あれ、元カレのです』

なぜかしどろもどろに答える。悪い事は何一つしていないはずなのですが。

『そうか』

かこーん、とまた、鹿威（しかごゑ）しが鳴つた。

まあ、今回のお見合いはお断りされるだろうなあ、なんて冷静に考えた。そもそもあんまり、いい印象持たれてなかつただろうから。ファーストコンタクトがヒールで踏んつけて口紅べつたりな酔っ払いだなんて。絶対絶対、お断りされちゃうよなあ……

——なんて思つた記憶を、私は青い空に舞う白いダリアのブーケを見ながらなぜか思い出した。きゃあ、という歓声とともにブーケは秋の日差しを反射しながら友人の腕の中に落ちて、友人は嬉しげに手を振ってくれた。それを投げた本人である私も手を振り返す、振り返すけれどもいまだに混乱している。な、なぜこんなことに……

私が着てるのは、真っ白なウエディングドレス。それは、鮫川（しやうけん）さんが、……横で相変わらず無愛想な顔で白いタキシード（なぜか似合ってる）を着てる鮫川（しやうけん）さんが『似合う』とほつりと言つたから決定したマーメイドタイプのウエディングドレスで……つてそんなことはどうでもいいんです。

なんでお断りされなかつたんだろう？

お見合いのあと、こちらからお断りするのはおこがましいなど（だつてスベックが全然違う！）つて気後れ（きごくれ）してしまつた。お断りのご連絡を待つてたら、まさかの『またお会いしたい』で。気がつ

いたら夜景の見えるレストランで指輪をもらっていた。そこまでお見合いから、たったのひと月。そして（よくわからない）出会いから半年と少し、いま、なぜか式を挙げている。

「美保」

名前を呼ばれて、はっと我にかえる。

「大丈夫か」

「あ、大丈夫です」

鮫川さんは無愛想な顔面に、少し心配そうな色を浮かべた。……まあこのくらいの表情の変化ならわかるようになってきました。結構、優しい人みたいなんです。いまだになんで結婚にまで至ったのかは謎だけれど――

式、披露宴ひるつえんとつつがなく進み、私は隣で勧められるがままにアルコールを飲んでいる鮫川さん（ザルだなこのひと）をチラ見したりなんざりしてうちにハッと気がついた。何かの折に、うちの父親の肩書きが読み上げられたときだった。

「須賀川警察庁長官は、新郎、鮫川修平くんの大学のOBでもあり」

最初は「うちのお父様ってそんな偉そうな肩書きしてるんだなあ」くらいのものであったのですが、

「あ」

「どうした？」

高砂席たかさきで、不思議そうに私を見る鮫川さんに、とつても申し訳ない気持ちになる。

……断りません、よね。断らないっていうか、断れないでしょう。そんな偉い人の娘とお見合

い、断れないでしょう？

ど、どうしよう。対個人のスペックで考えていたけれど――私のバックにはあの父親がいたんだ。親族席でニコニコしてる（ちよつと泣いてた）父親、あの人、そんなに偉い人だったの？

私が断るべきだった、よね。思わずチラリと鮫川さんを見るけど、「あ、別にいいのか」と考え直す。だって彼は、キャリアだもの。きつと出世も狙ってる。そうなれば「私」との結婚はきつと有利になるはずだ。

そっか、つて納得したあと、ちよつと、ちよつとだけ……私は不思議なことにかっかりしてて、それに驚いた。

#### 4 新婚さん

「ま、まとまらないよー」

結婚式から三日後の深夜零時過ぎ。私は大量の段ボールの前で途方にくれていた。

引越はとつても簡単なはずだった。七階から十二階に運んでもらうだけだから。

私の部屋はシングル用の1DKだけれど、十二階の修平さんの部屋は2LDKらしくて、当面は彼の部屋に住むということになった。

うん、なったはいいい。……なったはいいい、んだけれど。

「明日の朝には業者さん来るのになあ」

うー、とため息を一つ。そのとき、ピンポンとインターフォンが鳴った。誰だろうこんな時間に、とインターフォンの画面を覗いて、少しびっくり。

「じゅ、修平さん」

三日前、結婚式を挙げたばかりの、私の旦那さん。ぴしっとしたスーツなのは、お仕事だったから。というか、式の翌日には出張のお仕事で、式の直後には飛行機に乗った。超忙しい……につき、新婚旅行も随分先の予定。別にいいんだけど。……というかスーツってことは、出張から帰ってすぐ来てくれたのかな？

「……なんか、下の名前で呼ぶの気恥ずかしいな」

ぱりぱりと頬をかきながら、ドアを開けた。

「どうしましたー？」

「手伝おうかと思って」

仏頂面ぶつどうめんでそう言う修平さんの手には、コンビニの袋。

「陣中見舞いだ」

「あは、ありがとうございます」

とりあえず上がってください、と部屋に通してすぐ。修平さんはスーツのジャケットを脱ぎながら、とても難しい顔をした。ネクタイも外して、ソファの背にジャケットと一緒にかける。

「引越しが下手だな」

きよとんと修平さんを見上げた。ええと、上手い下手あるのかな、引越し。

「少し食べている」

コンビニの袋の中には、あったかなおでん。……と、コーヒー？ 首を傾げていると、はっと気が付いたように修平さんは言う。

「……合わなかったか」

「え？」

「両方、……君が好きな食べ物だと思っただして」

つい、と修平さんは少しだけ照れたような目線。あ、わ、なんか……ずるい。ていうか、覚えててくれたんだ。

お礼を言っ、ふと尋ねた。

「でも、よく覚えてましたね」

そんなこと、私自身には話した記憶もなかった。修平さんは何という事もなく、言う。

「必要な情報は忘れない」

情報。その言葉に、私は少しだけ目を伏せた。そうだ、修平さんにとって私との結婚は……出世のための、ものなんだから。

……気に入らなくて、しょうがない！ 気を取り直してローテーブルにおでんを置いて「いただきまーす」ともぐもぐ食べてるうちに、さっさと片付いていくお部屋……。あれ？

「えー、うそ」

ぼかん、としている間に段ボールに収まっていった荷物たち。

「どうせすぐ開けるんだ、無理して整理整頓せいとんしなくてもいい」

「う、ごもつともで」

せっかくだから、とか思っちゃったんだよね。

「俺も食おう」

修平さんは私の横にどかりと座って、きちんと手を合わせた。

「いただきます」

「召し上がれ？」

召し上がれもなにも、これ修平さんが買ってきたやつなだけだけれど。でも修平さんは特に何か言うこともなく、ぱちんと割り箸を割った。

「うまい」

「美味しいですよね、コンビニでおでん」

うむ、って感じに修平さんは頷く。こういうとき、仏頂面ぶつどうめんなのになんとか可愛いんだよねあ。じつと見ると目があった。

「何か」

「いいえ」

くすつと笑うと、ふ、と修平さんは申し訳なさそうな顔を（よく見ないと気付かないけれど）した。私は首を傾げる。

「すまなかった」

「え？ なにがです？」

「式のあと、ひとりにして」

「いえっ、お仕事ですし」

私はほつと笑った。なあんだ、そんなこと。修平さんは頷いて、私の頬にそつと、少し遠慮がちに触れた。

「……寂しい思いをさせただろうか」

「えーと」

式のあととは疲れて爆睡したりダラダラしちゃったりして……あんまり考えてなかったかも。でもなんか、全然大丈夫！ っていうのも、なんか。

「す、少し？」

「悪かった」

無愛想顔ながら、ほんの少し眉間に申し訳なさそうな色を浮かべて、修平さんはそう言った。

「いえ！ ほんとに、それは」

お仕事ですもんね、と微笑む。

す、と修平さんの目が細くなつて——その目に何か熱いものがあることに、今更ながら気がついた。欲、的なもの。……そりゃそう、か。だよな？ だって私たち、新婚さんだ。愛情があるにしろ、ないにしろ。

ゆっくりと唇が重なる。……あ、やわらかい。案外柔らかいんですね、なんて思ってるうちに、口内に舌がねじ込まれてくる。

「んっ」

思わずびくりと身体をゆらして、修平さんのシャツを掴んだ。大きな手が私の後頭部を支えて、私は口の中を食べられるみたいにキスをされる。柔らかなところを舌先で撫でられ、上顎を舐められて——もう一方の手が、するりと私のシャツに入り込む。あ、どうしよう、下着、揃ってなかったかも！……ていうか、そもそも今ロントにジャージだし色気もへったくれもないな、……なんて余計なことは、与えられた快感で、すぐに頭から消えた。

彼の手はそつと私の乳房を包んで、唇から離れた舌先は、首筋をぬるりと舐めあげる。

「ひゃ、あ、やだっ」

思わず出た声に、修平さんは顔を上げて、少しだけ口の端を上げた。

「ここが弱い？」

「や、そんなこと」

「こっちは」

ふっと耳たぶを噛まれた。それから耳の穴にねじ込まれた舌。

「は、あうっ」

「……感じやすいんだな」

少しのからかいを含んだ声。た、楽しそうですね！

その声が耳のそばでするものだから、しかも結構いい声をしてらっしゃるものだから……余計に、なんか、敏感になっちゃう。どうしよう、と思うのにほとんど無意識に太ももを動かしてしまっていた。久しぶりだから、こんなのっ……！

お見合い後、お付き合いの段階では修平さん、一切私に手を出してこなかった。淡白な人なのかなど思っていたけれど……この感じ、そんな人ではなさそう。もう一度唇が重なって、舌をちゅうつと吸われた。

「んんんっ」

嬌声こせうが漏れ出て、私は自分の下着がすっかりべしょべしょになってることに気がつく。ほぼちゅーしかしてないのにつ。恥ずかしくて、なんだか目頭が熱くなる。

「……美保？」

「はっ、はい!?」

「嫌、だっただろうか」

いつのまにか、服から出ていっていた大きな手のひらは、そつと私の頬に触れた。そして親指で、涙を拭う。

「無理しないでいい」

「ち、ちがっ」

ていうかここでやめないで！ 熱を持って疼く、身体。

「違って……恥ずかしくて」

「恥ずかしい？ なにが」

「か、かん」

「かん？」

私はほんの少し口籠もったあと、思い切って口を開く。

「……感じすぎてるのがっ」

「感じすぎてる」

「く、繰り返さないでください、わあ!？」

ひょいと持ち上げられた。お姫様抱っこ！ 段ボールの山のそばに、まだ置いてあったベッド……

(まあ今日まで寝る予定だったから) にゆっくり横たえられる。

「美保」

「は、はいっ」

思わず返事をして、その真つ直ぐな目と目線ががっちり合う。

「すまない、加減できそうにない」

「加減？」

修平さんはシャツを脱ぐ。引き締まった身体。警察官だから？ 涙目で見上げると、修平さんは

ゆるゆると私の頭を撫でた。

「君がそんな顔をするから」

……どんな顔を、してるんだろう。私。

「……少しは、自制する」

ぼつりとそう言って、修平さんはちゅ、と目尻に唇を落とす。

「今日のところは」

今日のところは？ 聞き返す前にブラジャーがシャツごと上にずらされていく。

「んうっ」

我ながら色気もなにもない声が出た。すっかり勃ってしまつた乳房の先端を、くりつと弄られる。

「やあ……っ」

「ふ」

なんだか笑われた。

「な、んで笑っ」

「可愛いと思つて」

か、可愛い!? 修平さんにそんなこと初めて言われたよ……! ドキマギしてるうちに、もう片方の手がジャージごと、すつと下の下着をずらす。

「……穿はいている意味がないな」

思わず赤面。うん、もうべっしょべしよでした、ほんとにもう……どうしちゃったんだろ。

するりと足から下着をぬがされる。膝裏を押され、足を広げられた。そうして、修平さんの指がトロトロと淫みだらな水でぬるつく入り口に触れる。じつくりと、入るか、入らないかのところで指が  
行き来する。

「……っ、あ、……あっ」

乳房を揉まれながらそんなことをされて、自分から出てると思えない、甘い高い声が上がった。指で弄られ、摘まれ弄ばれていた乳房の先端を、修平さんが口に含む。

「ひゃうっ」

温かな口の中、舌の先でつんと突かれて、吸われて、甘噛みされた。同時に、指は相変わらずもどかしく、すっきり濡れて蕩け落ちそうな裂け目を行ったり来たり……苦しいほどの快感に、私は喘ぐ。

「やっ、あ、修平、さんっ」

指で触れられているだけなのに、すでに理性は半分、どこかへ行きつつある。

「お願い……っ」

ぬるぬるのそこを触るばかりで進めてくれない修平さんに、私は懇願する。入れて、動かし——ぐちゅぐちゅにして……イかせて、欲しい。

「どうして欲しいんだ？」

はつきり言わないとわからない——そう言っつて修平さんは、肉芽を摘まむ。

「やあっ」

「ひくひくしているな」

少し興味深げに、修平さんはそう言っつて薄く笑った。すっきり敏感になっていたソコを親指でぐりぐりと刺激され、あられもない声が漏れ、思わず腰が上がっつて……今更ながら、恥ずかしくなる。

「ふあっ、あ、あのっ、あんっ、で、電気」

「ダメだ。見ていたい」

「へ……っ!? や、っ、恥ずかしいです」

「なぜ？」

修平さんはそつと頬にキスを落とす。

「こんなに綺麗なのに」

「きれ、あうっ」

骨張った指が、一本、ぐちゅりとナカに入っつてくる。

「ふあ、っ、……んっ、や、あっ」

求めていた以上の快楽に、身体が跳ねる。

「欲しいと言っつたのは君なのに」

やっぱり少しからかう口調で修平さんは言いながらナカを探る。指を増やして、バラバラに動いてイトコを探すようなその動きが気持ちよくて、壊れそうで、私はただ喘ぐ。

「やッ、あっ、あっ、あんっ」

「このあたり、か」

ぐりつと動かされた指が、キモチイイところをぎゅうと刺激する。声にならない声が出て、私はきゅうきゅうと修平さんの指を締め付ける——。視界がチカチカした。星がみえる、みたいに。

あ、もう、ダメ。頭の中がスパークするみたい。だらしなく、口元から涎が垂れる。やだよ恥ず

かしいよ。それを修平さんはちろりと舐め上げて、それくらいの刺激でもイッたばかりの私はびくんと反応してしまう。

修平さんがベルトを外す音がして、私は……欲しい、って素直に思ってしまった。

本当に、どうしちゃったんだろう、私？ 頭の中まで、とろつとろ、だ……

修平さんは優しいキスを私に落として——唇を重ねたまま、私のナカに挿入<sup>はい</sup>ってきた。

「あ、あうっ」

十分に、というか、十分以上に濡らされて解<sup>ほ</sup>されていたはずなのに、みちみちと広がる感覚。お、おつきい！ いや、見てわかってたけど——押し広げられて、修平さんがゆっくと押し進んでくる。

「は、あ、あ」

「大丈夫か、……美保」

心配げな声で、修平さんは優しく私の名前を呼ぶ。私はゆっくり頷いた。

「う」

「い？ どうした」

「いっぱい、して……」

私はどんな顔をしていたんだろう。ふしだらな女だと思われただろうか？ でも、お腹の奥がきゅんきゅんして、欲しくて、突いて欲しくて、ナカの褰<sup>わた</sup>がぐちゅぐちゅに疼<sup>うず</sup>く。

私、こんなに性欲強<sup>つよ</sup>かったっけ。恥ずかしくて……でもその羞恥<sup>しゆうぢ</sup>がなぜか、余計に身体<sup>うづ</sup>を疼<sup>うず</sup>かせる。体中<sup>ていぢゆう</sup>が欲情<sup>よくじやう</sup>して、この人を、修平さんを求めてとろとろになっているような、そんな感覚。

「奥まで、して、ください。いっぱい、して……」

修平さんはぐっと口をひき結んだあと、私の腰を掴んで、ただひとこと、私の名前を呼んだ。

## 5 恋慕<sup>れんぼ</sup> (修平視点)

多分、痴漢事件のときには、すでに惚<sup>ほ</sup>れていた。どこに？ と問われれば困る。けれど——

例えば、きちんと汚したシャツのクリーニングの心配をしてくれたこと。

例えば、そのときに読んでいたのが宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』だったこと。

例えば、そのときに寝落ちしながらもただ、待っていてくれた真摯<sup>しんしん</sup>な性格<sup>せいかく</sup>だとか。

これが恋だと気づいたのは、事件のとき、彼女の部屋で一晩を過ごして。

すうすうという規則的な寝息。それを聞いているうちに、なぜかひどく安らいで、同時によくわからない感情<sup>かんじ</sup>に襲<sup>おそ</sup>われた。

今ならわかる。——嫉妬<sup>しつと</sup>、だ。明らかに男物のスウェット。……こんなときにその男には頼れないのか？ 頼らないのか。

(そんな男はやめて、俺に)

喉<sup>のど</sup>から出<sup>で</sup>かかって、やめた。それは彼女の弱みにつけこむようで、それは己<sup>おのれ</sup>を許<sup>ゆる</sup>せなくて。だから、それからすぐ——上司から連絡<sup>れんらく</sup>があり、お見合い話<sup>みあひわたり</sup>があると聞いたとき。俺は即答<sup>すげん</sup>で断<sup>ことわ</sup>った。



『なんで!』

『好きな人がいます』

『あれ今お付き合いしてる人、いないって』

『片思いです』

『あ、そー。まあほら、写真だけでも』

須賀川さんのお嬢さん、と聞いて。これは断りづらいぞ、と思いながら写真を開いて——ぴしりと固まった。

『鮫川くん?』

『結婚を前提に進めていただきました』

『え、うそ、変わり身早いね?』

よほどタイプだった? と揶揄う上司に『本命でした』と俺は告げた。不思議そうな顔をされて——やがて、お見合いを経て。

お見合いのことは、緊張しすぎて記憶にない。茶柱を見て微笑む美保が可愛かった、くらいしか。不安に思いながらも、申し出た「お付き合い」。すぐに返事が来て、嬉しくて、しばらく機嫌が良かった。良すぎた。部下に不気味がられる程度には。ただ、須賀川長官に念を押された。強く強く。

『いいかね鮫川くん、結婚するまでは手を出してはいけないよ』

『それはどの程度でしょうか、長官』

『手を繋ぐくらいは許可しよう』

……内心、中学生か! と思わないでもなかった。だから急いだ、という訳でもないのだが。

プロポーズ。自分でも、口下手なのは自覚している。だから、できるだけシンプルに。余計なことは挟まずに——『結婚してください』

美保は不思議そうに『私でいいんですか?』と首を傾げた。

『君がいい』

精一杯の、言葉。

好きです愛してます一生そばにいてください、と言えればどれだけいいか。次に絞り出した言葉が『俺に毎朝味噌汁を作ってくれ』とは、これはもう、時代錯誤としか思えない。

が、それでも美保は頷いてくれた。

思わず部下に漏らしたことがある。

『うかうかしていたら、他の男に持っていかれるかもしれん』

『そりゃあ、まあ、署長。ベタ惚れしてますね』

『そうだろうか』

ベタ惚れ? ——そういう揶揄われかたをしたのは、初めてだ。今までも、交際経験はある。けれど、誰とも長続きはしなくて。それに対して未練もなくて。こんなに執着するのは、初めてだ。だから、……自覚はある。自分にブレーキがかかってないことくらい。何も見えてないことくらい——それくらいに、惚れてしまっていること、くらい。

初めて、美保に「そういう意味」で触れたとき——指先が震えているようで……でも、彼女は俺

を受け入れてくれた。童貞でもあるまいし、とそう思うのに——心臓がうるさい。俺の少しの動きに、身体を震わせ潤わせ蕩ける彼女が愛しくて仕方ない。

「奥までして」

そう言って声を震わせる美保が、可愛くて、綺麗で。セックスのときは、素直なんだな、とその柔肌に触れながら思う。普段は我儘ひとつなくて、素の彼女を隠されているようで、寂しくて——だから、嬉しかった。

俺にしがみつかながら、ただ嬌声を漏らす彼女の蕩けた中が、ぬるぬると、きゆうきゆうと締まる。今すぐにもナカに吐き出したい快樂をぐつと抑えて、何度も腰を打ち付けた。

彼女が欲しいと言ったから。甘えた声で、欲しいと喘ぐから。

「や、あつ、イクの、イっちゃうの、修平さんっ、あんっ、イク、やだ、はあ、ああつ、んんんっ」  
ところどころの肉壁がきつく吸い付くように、俺を締め付けて——彼女が達したのを確認して、己を引き抜いて、その薄い腹に吐精した。

荒い息。俺に組み敷かれた美保は、はうはうと可愛らしい呼吸を繰り返す。その姿が、堪らなく胸を締め付ける。

「愛してる」

囁くように口から出た言葉が、聞こえていたのか、いないのか——美保はとろりとした目で、俺を見て、笑って……そのままゆっくりと、眠りに落ちていく。

そうして、俺ははつきりと確信する。俺はもう、この人から離れられない。この人なしでは、生

きていけない。生きていく理由がない。

彼女を抱きしめて眠る。すうすうという寝息は、やはり、心地良くて。

（人間、恋すると馬鹿になるものなのだな——）

そんな自分がおかしくて、ほんの少し、笑った。

## 6 よだか

翌日——引越しの片付けはなかなか終わらなかった。その日遅くに、晩ご飯をケータリングで済ませた頃、なんだか部屋がようやく片付いた感じになり、一息つく。

「修平さんごめんさい、明日も早いのに」

キッチンを借りて……じゃないな、今日から私のでもあるキッチンで、グラスにビールを注いで（本物だ、奮発です）そんな話をする。修平さんは首を傾げた。

「俺は問題ないが……美保は？」

疲れているだろう、と頬を撫でる大きな手。この人、こういうの好きなのかな。

「いえ、なんででしょう。テンションが高いせいなのか、割と元気です」

大きな背を見上げながら答える。引越しとかの非日常って、なんかテンション上がるよね。……まあ、このところ非日常の連続だったわけなんだけれど。

「そうか」

修平さんの手は、気がついたら耳を撫でていた。こりこりと軟骨なんこつを指で挟んだり、耳たぶを摘まんでみたり。

目が合う。なんだか胸がきゅうんとした。

「……座ろうか」

修平さんが、ビールグラスをふたつ持って歩き出す。広い背中。

「はい」

返事をしながらついていく。リビングのガラスのローテーブルの前、黒いソファに修平さんは座って、ローテーブルにグラスを置いた。私はちよこんとその横に座る。……なんか緊張しますね？

「このグラス」

修平さんはビールをひとくち。私もひとくち。うん、美味しい。さすが、本物。

「新品、だったな」

「はあ」

私は相変わらず気の抜けた返事しかできない。

「使うかなーと。こないだ買いました」

あまり食器がない、みたいな話を聞いていて。気分だけでも新婚さんらしく、色違い。うすはりグラス、っていうのかな。シンプルなデザインだから、外れないかなと思ったのだけけれど。

「趣味ではなかったですか？」

そういうの、こだわりあるのかなと聞いてみる。勝手に買っちゃ不味まずかったかな。

「……いや、とても、……良いと思う」

顔こそ無愛想だけれど、声は穏やかだったから安心した。

「美保」

ことり、と修平さんはローテーブルにグラスを置いた。

「はい？」

返事をするやいなや、修平さんは私を軽々抱き上げて、その膝に乗せる。グラスの中で、金色の波が揺れた。

「……!？」

ん？ 私を乗せるの？ なんで？ 当の修平さんは涼しい顔で、テレビなんかつけている。BSの国際ニュース……。あれ、観る人いるのかなと思つてたらここにいた。

「好きにしている」

好きにしている、と言われました。ぎゅうと抱きしめられて、あんまり身動き取れないですし、うーん。……分厚い胸板。聞こえる心音は、少しはいい？

……きのう、この人とエッチしたんだよなあ。なんか、妙な感じ。

あつたかくて滑らかな肌の感触とか。筋肉の硬くて柔らかい感じ、とか。最中、目があったときの熱い視線とか、そういうのがありありと思ひ浮かぶ。気持ち良すぎて最後のほう、ほとんど記憶がないや……って、やばい！ ひとりでやらしくなるとこ、でした。

ちら、と見上げる。修平さんの視線はテレビ。BSニュースは、ニュージャージー州だかなんだかの事件の話をしている。どの辺なんでしょう。アメリカだってことはわかる。私はローテープルの隅っこに置いてあった、文庫本を手にとった。さつき、本棚で見つけた宮沢賢治の短編集。少し古い。何回も読んでるのかな、って感じの草臥れ具合。読んだことない話も入っているやつなので、借りて読もうと持ってきてきたのです。ほんとに読むんだなあ、宮沢賢治。意外です。まあ、イメージ通りの剣豪歴史小説とかもあつたから、私の第一印象もあながち外れではなかった、のかな？ 最初のお話は『よだかの星』。集中して読んで、読み終わった頃に（って短編だからすぐなんだけれど）本を持つ私の手に、修平さんが触れてきた。きゅうと握られる。「ん？」

見上げると、目が合った。ニュージャージー州とやらのニュースは終わったのかな、とぼうつと考えると、そつとキスをされた。柔らかな唇。触れるだけの、優しい、やわらかな、そんなキス。昨日みたいな、やらしくて熱いキスではなくて。なんだか、なんでしょね？ 安心するような、そんなキス。離れていく温かさ。修平さんは目をほんの少し、細めた。

「好きなのか、よだかの星」

「え？ あ、はい」

「かなり集中して読んでいたから」

久しぶりに読んだから、なんだか夢中になって読んでしまっていた。「好きっていうか、……なんか、重ねてしまふところがあつて」

修平さんを見上げる。……この人には、あんまりない感情かもなあ。

「ほら、よだかつて、他の鳥皆に虐められてるじゃないですか」

「……ああ」

「兄弟は、皆綺麗で」

『よだかは、実にみにくい鳥です』

そんな言葉で始まるこの物語。よだかは、他の鳥から疎まれ、嫌われて暮らしていた。兄弟は「美しいかわせみ」や、「鳥の中の宝石のような蜂すずめ」なのに。

「なーんか、重なるというか？」

「重なる？」

私はほんの少し、笑う。

「ほら、私。家族というか、一族の中でたったひとりの『平凡な人』なんです」

「平凡？」

ものすごく訝しげな声で聞き返された。そこ引つかかるところかな？

「お父さんは言わずもがな。母もあれで茶道の家元なんかしてますし、お兄ちゃんは総務省にいて、お姉ちゃんは検事さん」

ちなみに祖父母叔父叔母みーんな「すごい」人、だったりする。みそつかず、なのは私だけ。しかも驚くべきことに、彼ら彼女らは顔面も整ってらっしゃるのです。同じ遺伝子のはずなのになあ。少しバランスや配置が変わるだけで、こうも平凡な顔立ちになりますか!? っていうくらいに、私

はとても普通。とてもとても、普通。

「……普通であることは、嫌いではないんです」

家族は優しい。というか、親戚全体で（甥っ子姪っ子が生まれる前は）一番年下、末っ子の私を可愛がってくれている。いまも。

「友達もできました。仕事も希望の職につきました。なのに」

どうしても比べてしまう。きらきらしい宝石と、嫌になるくらいに平凡な私とを。

「俺は」

修平さんはとても難しい顔をしてる。難しいっていうか、不思議そうな顔を。

「君を、平凡だと思ったことはないのだが」

心底不可解です、って顔をしてる修平さんに、私は言う。

「け、けど！ お姉ちゃん、美人でしょ？」

そんなことを聞いちゃうのは、なんだろう。……もうお姉ちゃん結婚してるから仕方ないけど、もし独身だったらお姉ちゃんと結婚したかったんじゃないかな？ 長官の娘、っていう同じ条件なら、美人で頭が良いほうを選びたいに決まってる。

「……そうだったか？ 美保に似てるから、うん、綺麗な人なんだろう」

「えっと、そんなに似てないと思うのですが」

パーツは似てるとは言われる。配置ですよ問題は配置。

「目が似てるなどは、思った。顔合わせと、結婚式でお会いしたな」

「え？ はい」

「……顔合わせか。懐かしいな」

「三ヶ月前ですが」

割と最近なんじゃないかなあ。

「あとき美保は、葡萄酒色の振袖だった」

「あ、はい」

「見合いのときの振袖も似合っていたが、うん、あんな色も似合うのだなあと感心した」  
なんか話がずれてる？

「そうでしたか？ なんか、あんまり似合ってなかったような」

私には少し、上品すぎる色使いだったような気もしていた。

「そんなことはない。ほら」

修平さんが見せてきたのはスマホの画面。ていうかロック画面。え、壁紙にしています？ 私の振袖？ ……というか、二人の写真。なんだか変な顔で笑ってる葡萄酒色の振袖な私と、仏頂面でかつちりスーツな修平さんと。

「……初めて二人で撮った写真ですね？」

修平さんはなんでか視線をそらして頷いた。

「ていうか、写真あんまないですよね」

二人で撮ったのなんて、このときと、つい最近の結婚式くらいじゃないかな。

「……その」

その声に、修平さんを見上げる。

「これからは、たくさん、撮ろう」

「え？ はい」

「うん」

なんだか満足気に、でも生真面目に修平さんは頷いて私を抱きしめる。きゅう、と——私ほもがいてその腕から逃れた。

「美保？」

「撮りましょうか、修平さん」

私は自分のスマホをかざす。インカメラを起動して。

「記念日ですか」

「記念日？」

「同居記念日？」

私が笑うと、修平さんはやっぱり生真面目に無愛想に、インカメラを見つめて頷いてくれた。

「じゃー、ハイチーズでいきますよ」

せえの、そう言っただけはぱしゃりと画面をタップする。

同居記念日の二人の写真は、笑顔の私と無愛想な修平さん。でも、彼のその唇がほんの少し緩んことに私は気付いていて、それがなんだかとても嬉しかったり、した。

スマホの写真を眺める。今までの彼女さん……とかとは、こういうのあんまりなかったのかな……なんて、考えて。——違和感。ううん、違和感、っていうか。これは。このもやもやした感情は。……やきもち？

自分に、びつくり。修平さんのこと、いい人だとは思っていたけれど、でも、ごりごりの恋愛感情みたいなのは、なかった……よ、ね？ そもそも「恋愛はもういいや」っていうところが、どうしてもあつて……

くいー、とビールを飲み干す。ちょっと酔ってるから、かな？ そうだそうだ、うん。このドキドキとかも、お酒のせいだよー。

一気におおってしまったせいか、疲れのせいか……じんわりと、酔いが回っていく。

「美保。俺の前だからいいが」

「ひゃー」

「あまり飲みすぎなよ」

そういえば、初めて会ったときもお酒がめちゃくちゃ入ってたんだ……

「よ、酔ってません」

「ほう」

修平さんは、私の熱い頬に触れる。鋭い目つき、が少し緩んだような。大きな手が、ヒンヤリして気持ちいい。思わず擦り寄る。

「……本当に」

優しい瞳でそう言われて……思う。……この人のこと、なーんにも知らないなあ。結婚できればいいやつて、なんとなくお見合いして、なぜかとんとん拍子でここまできて。

さっきのちやもやが、頭にいつぱいになっていく……

「お、お手洗い。行ってきます」

修平さんの膝から立ち上がって、リビングを出て——トイレの前、玄関前の廊下で立ち尽くす。頭が、ぐらぐらした。

修平さんは……優しい、人だと思ふ。「よだか」と自分を重ねてる、なんて詮ない話を、一生懸命に耳を傾けて聞いてくれた。

「……『これからは、たくさん撮ろう』か」

そう言ってくれた、あの優しい瞳を思い出す。

(あんなふうに、ほかの人にも接していたのかな)

想像が止まらない。だつてあんなにかつこいいひと、今までだつて大事にしてきた女性が何人もいたつて、おかしくない。だから、あれは……私にだけ、特別に向けられた表情でも、声でもないんだ。それどころか——その人たちは「修平さんの意志」で大事にされていたけれど……私が大事にされてるのは、単に私が「長官の娘」、だからであつて……

心臓が冷たく、変な鼓動を刻んだ。そんなの嫌だ、つてはつきりと自覚する。私は、私の感情がよくわからない。なんでこんなに、辛い……？

私は「よだか」なのに。ちゃんと身の程を、知ってるはずなのに——

ああ、ダメだ。少し、酔いを醒ましたほうがいいかも。

外の廊下に出よう、とサンダルを履いてドアノブに手をかけたところで、名前を呼ばれた。

「美保？ どこに」

心配して追つてきてくれたのだろう——修平さんが、ぎよつとしたのがわかった。私、泣いてたから。ああもう、なんで？ 自分で自分がわからない。

「どうした」

慌てて駆け寄つてきてくれる。

ホロホロと溢れる涙。……なんで私、泣いてるの？ 酔ってるから？ 泣き上戸だつて、私？

そんなはず、ないんだけど。

「どこか痛いのか」

その言い方に、ふつと笑つてしまう。そんな、子供扱いみたいだな。私を覗き込む顔が、明らかに焦燥を浮かべて、私はなんだか満たされてしまう。こんな顔するんだ？ 私が酔つて、少し泣いちゃったくらいで、私にもあつたんだ、こんな感情……

……うん、さすがに認めよう。私、どうやら、この人のこと好きになつてしまったみたい。

……違う、かな。好きだつたのかな。気がついてなかっただけで。——だから、結婚、したのかな。私。

「美保」

優しく、大切に発音するみたいに、修平さんが私を呼ぶ。誤解しちやいそうな、その声。私はあ

ななの、出世の道具でしかないはずなのにね。

「どうした」

「少し、酔ってるみたいです」

きゆう、と修平さんに抱きつく。びくりと修平さんの身体が揺れた。

悲しいような、面白いような。抱きついたくらいで……そんなに驚かなくなつて。エッチまでしたのに。——結婚までしたのに。それとも、抱いたのは気まぐれ？ エッチできれば誰でもよかった？

そんなこと、ないか。生真面目そうな人だもん。結婚したからには、私としかしない、んだろう。性欲発散目的、でもいいや。私は修平さんの耳を優しく、甘く、噛んだ。

「っ、美保」

「ねえ」

腕を首に回して、その整ったかんばせを覗き込む。

「やあらしい、気分なんです……私」

玄関なんかでだらしなく発情してる私——と、それに当てられたっぽい修平さんは、そう広くはない玄関でじっと見つめあう。そうと、あつたかな首に吸い付いて、舌を這わせた。

……あ、おつきくなってる。

抱きついた身体に、服越しに主張してくる、それ。

「美保」

少しだけの焦燥を含んだ声が、耳朶を震わせる。こんな声は、初めて、聞いた。うしろ向きに抱きしめられて、熱い、大きな手が服にすりと入ってくる。ほう、と息を吐く。

「熱い」

耳元でそう囁かれて、背中がびくりとする。服の中でお腹と腰にやわやわと触れていた手が、そつと上がり、私の胸のふくらみに触れる。ひゅつと息を呑むけれど、それに構うことなく、ブラジャー越しにやわやわと触れられ続けた。

もつと、つて——そう思つて、ほとんど無意識に腰が動く。恥ずかしい、でも、もつと。

「ちや、んと触つて？」

軽く振り向いたその口に、噛み付くようなキスをされた。蹂躪される口腔、淫らにつう、と口の端から垂れる唾液。やがて唇を離れた修平さんは、そつと私の耳元で囁く。

「どこを？」

「……っ」

その間にも、修平さんはブラ越しにゆっくりと胸を刺激するだけ。触れて欲しい先端は、びんと勃つて痛いくらいだった。

「……ちや」

「ちっ」

い、言えないよ！

「くび……っ」



ふ、と笑う声。

「今日はそれでいい」

「きよ、う？ あ、はあう、っ」

ブラに入り込む手と、掴まれる先端。その快楽に、お腹の奥までが疼く。思わず上がる声に、修平さんは嗜めるように、でも楽しんでる声色で言う。

「そんな声を上げて。外に聞こえるぞ？」

私はハッとする。ここ、玄関先……！

「や、やだあっ」

「……聞かせるのはもつたないな」

そう言っつて、胸から離れた手で私の頭を持って横を向けさせ、少し乱暴に口を塞ぐ。私の腰を固定していたその手が、スカートをたくし上げて、そのまま下着のクロッチ部分を横にずらす。すっかり濡れてるソコが外気にふれて、冷たくて。それがなんだか——はしたないほど、気持ち良かった。「んうっ」

声を上げたいけれど、塞がれて、舌で柔らかな頬の内側、粘膜を舐めあげられていて、頭がくらくらする。その蕩けはじめたソコに、ずぶりと無骨な指が、ゆっくりと入っつていく。

「んっんっんっ」

深くなるほどに、上がる声。けれど、唇は離してもらえない。こくりと喉を動かす。私のものか、修平さんのものか——入り混じった唾液が喉を伝った。指が増やされて、私の「いいところ」を的

確に刺激してくる。

「ん、んあ、っ、んんんっ」

同時に親指で敏感な芽をぐりぐりと押されて、あっけなく、本当にあっけなく私は達してしまう。やっと離れた唇から、私は何度も荒い呼吸を繰り返す。くたりとした私を支えながら、修平さんは私の耳たぶを噛んだ。

「ひとりで気持ち良くなっつて」

「……ごめん、なさ」

「謝ることじゃない。俺が」

そうしたんだ——耳元で、そう告げる低い声に、いったばかりの私の子宮が疼く。欲しいっつて。欲しくて仕方ない、っつて。

「美保」

そう名前を呼んで、そして優しいキスをおでこに落とされた。

「キツかったら言え」

そう言っつて、私を玄関のドアに押し付ける。カチャカチャ、というベルトを外す音。ごくりと唾を呑む。チョーダイと、ナカが期待でうねうねと蕩ける。腰を持ち上げられて、入り口にそれを添えられた。硬くて、熱くて、大きな、それ。

——なのに。それは入り口をヌルヌルと刺激するだけで、入っつてきてくれない。

「しゅ、へー、さん？」

顔だけ傾けて、その顔を見る。真剣なその顔は、じつと私を見て、それから「今日は」と口を開いた。  
「加減しない」

「ひゃ、やああんっ」

一気に貫かれる。奥にぎゅうつと当たると、欲しかったモノ。

「あっ……んんっ」

自分のナカがうねって、そしてきゅうきゅうと締まるのがわかった。欲しかった、すごく欲しかった。涙がほろり、とこぼれた。

「美保」

心配そうな声。

「ちが、あのっ、あんっ、きもち、よくてっ」

ゆっくりとした抽送ちゆうそうを繰り返す修平さんに、私はなんとかそう言う。

「気持ち良くて？」

「そ、おっ、気持ち、良くて……泣いてるの、っ、ひゃあんっ」

ぱしん、と強く打ち付けられる腰。

「あまり煽あおるな」

「あ、煽あおって、なんかあつ、やつ、はあつ、やつ、ふあ、っ、あつ」

激しめに抽送ちゆうそうされはじめた快楽に、私は壊れたみたいに上擦った声を上げ続ける。その口を、修平さんは大きな手で塞ふさいだ。

「もったいない」

「ん、んふうっ、なに、が……？」

手の隙間から、そう問い返す。

「美保の声が廊下に漏れるのが」

「あつ、あつ、ヤダっ」

そうだった、ここ、玄関で。廊下にそんな声響かせてたら、恥ずかしくてもう歩けないよ！

「……いや、聞かせるのも良いのかもしれないな」

そう言っつて、修平さんは挿入の角度をぐいっと変えた。

「っ!? っ、あ、……!!」

目の前で白い星がちかちかする。頭の中で、脳みそが溶けちゃったみたいにぐらぐらして、魚みたいに口をパクパクすることしかできない。

「美保」

優しい声で、修平さんは私の頭を撫でた。

「ココが、悦えいのか」

「っ、く、ふはっ、はっ、あっ」

エッチなんて、初めてなんかじゃない。修平さんとも二回目だし、小野さんと付き合ってた時点でそもそも別に処女じゃなかったし。多いわけじゃないけれど、人並みに経験してる、つもりだった。なのに、なにこれ、なにこれ、私、知らないよこんなの！ ぽろりと涙がこぼれた。

修平さんがソコに抽送し始める。すつごい、奥に当たって……！ 私は喘ぎながら、イヤイヤと首を振った。

「や、あんっ、ダメ、そこ、やあつ、壊れちゃ、ああつ」

ソコに当たると同時に、目の前で星がスパークする。修平さんが腰を動かすたびに、イヤらしい水音が、そのぐじゅぐじゅという、自分から出ると信じられないその音が玄関にこだました。

「ああつ、あつ、あつ、あつ」

私はほとんど泣いていた、と思う。修平さんに突かれるたびに、脳が溶けていく。肉壁が蕩けて、蕩けながらきゆうきゆう縮まって、修平さんが激しくなると、玄関のドアが軋む。

「や、やあつ、修平さんっ、ヤダっ、エッチしてるって、あんっ、バレちゃうよおっ」

これ、廊下に誰かいたら流石にわかるんじゃないかな。絶対声、漏れてるよ！ ドアも変な音してる……！

「わからせるのもいい」

「や、あんっ、なに言ってる、ッ」

私はドアに上半身を預けたまま、顔をなんとか修平さんに向ける。

「おね、が……ベッド、いこ」

「美保が」

修平さんの目は、ぎらぎらしていた。思わず息を吞んで、そして私のナカがきゆうんと締まる。

「美保が、いったら」

「ひゃあん!？」

ぱしん！ と更に激しく打ち付けられた腰。私の片腕を修平さんは掴んで、引き寄せるように強くスイングしてくる。

「ひゃ、あ、あ、アツ、やあつ」

目を閉じたいのに、閉じられない。ぱちちりと見開いたまま、私は涙を流して——そして修平さんの「ソコ」に強く当たったと同時に、頭の中がどろりと溶けた。

「あつ、あつ、あつ、あああ……ッ」

ナカが自分でも引くくらいに締まって、身体ががくがく震える。信じられないくらいに「いったら」るのが、わかった。

「あ、あ、あ」

もう言葉にならない。びくびくと痙攣しながら、私は自分から何かがとろりと溢れて、それが足をつたい、床を汚したのを知覚した。

なに、これ……？ どろりとした思考で考える。何が出ちゃったの？ ふわふわ考えていると、うしろからぎゅうつと修平さんに抱きしめられる。

「上手にイけたな」

「……は、あつ」

耳に当たったその息さえ気持ちいい。私、どうなっちゃってるんだろう……。赤くなつてびくりと反応する私から、修平さんは自分を引き抜く。

「あ」

栓を失って、私のナカに満ちていた何かがごぼりとまた、溢れる。こんなに濡れちゃうだなんて、こんなになっちゃうだなんて。私は寂しくて修平さんを仰ぎ見る。

「や、だ……抜かないで」

もっとして、欲しいのに。

修平さんは私のこめかみにキスしたあと、すうっと私を横抱きに持ち上げた。

「布団に行こう」

お姫様だつこで、ベッドに運ばれる。ぼずりと優しく横たえられて、私は恐る恐る修平さんを見た。

修平さんは「邪魔」って感じで自分の着た残りの服をさっさと脱ぎ捨てて、私のも脱がしてしまう。

「ひゃ、う」

「寒いか？」

私は首を振る。全然寒くない。むしろ——暑い。

視線は気がつけば、修平さんの屹立きりだちしてるソレを見てしまっていた。いつの間にか買っていたらしい、ベッドサイドの棚から出されたコンドームを修平さんが付けようとしてる、それ。

「どうした？」

「や、その」

私は照れ臭くて笑う。

「そんな大っきいの、入ってたんだなあって」

「入ってた？」

修平さんはほんの少し、口の端を上げた。

「また入るんだ」

ぐい、と膝裏を押され太ももをあげられる。その内側にキスをひとつ。そのあと、蕩よろけ切ったソコに、また入ってくる熱くて硬い、ソレ。

「……っ、あ、ああんっ」

それだけで、私は簡単に達してしまふ。……本当に、私の身体どうなっちゃうてるんだらう!?! 激しく、強く、修平さんはいつてる私をそれでも突く。

「や、あつ、修平、さんっ、ダメ、いつてる、いつてるのおっ、いつてるから、やめ、あ、ヤダ、はあ、お願、っ、壊れちゃう、……っ」

いつてるところを滅茶苦茶に突かれて、私は訳がわからなくなってしまう。イヤイヤと子供みたいに首を振って、涙が流れて、シーツを握りしめて、自分のナカがぐちゃぐちゃになってるのをただ、されるがままに。

「美保」

ひどいことを、激しいことをしてるのに、声だけはすごく優しくかった。目線を見ると、きゅつと眉根を寄せて、そんな目で修平さんは私を見る。まるで、切ない、みたいな……そんな目で。

勘違い、しそうになる。そんな目で見られると。そんな風に、名前を呼ばれると。

大きな身体で、修平さんは私を抱きしめた。武骨ぶこつな手が、腰と後頭部にまわる。

「あつ、あつ、あ」

ぎゅうぎゅう抱きしめられて。その身体に押しつぶされるみたいに突かれていると、苦しくて、狂おしくて、気持ちいい。

(死んじやってもいいや……)

頭がクラクラして、そんなことまで思ってしまう。こんなに気持ちいいなら、死んでもいい。

「美保、口、開けて」

もう何も考えられず、言われるがままに口を開けた。そこに捻じ込まれる舌、歯列をなぞって歯茎を舐めあげて、私の舌に絡みつく。

「んう、ふ、は」

「美保」

口から離れたその私の唾液でぬらぬらした唇で、修平さんは少し苦しそうに言う。

「イ、くぞ」

「……っ、あ、はい……っ」

修平さんは上半身を起こして、私の腰を掴み直す。角度が変わって、それだけで軽くイってしまふ私を、修平さんは少し満足そうに見ていた。やがて抽送は激しさを増す。私は身体を揺さぶられながら、ただ甲高い声で、甘い声で、啼くしかない。

「ああつ、はああんっ、アッアッあ、ッ、アッ」

だらしなく、声を上げるしか——やがて、私のナカもきゅうつと締まって、それと同時に修平さ

んが強く強く腰を打ち付けて、私を抱きしめた。薄い被膜越しでもわかる。……たくさん、出てる。

「……っ」

修平さんの、快楽に耐えるような、そんな声。その声があまりに愛おしすぎて、ひどく胸が痛んだ。感じてくれてる？ 気持ちいい？ 私のナカ、好き？ ……そんなフシダラな質問が頭をぐるぐるまわる。

やがて、私から身体を離れた修平さん。

「や、だ」

視線を向ける修平さんに、私は両手を差し向ける。

「ぎゅうつして、まだ、ギュって」

ふわふわと舌足らずに言う私を、修平さんは本当にギュつと抱きしめてくれた。鍛えられた腕、厚い胸板と、綺麗な鎖骨。その首元に擦り寄る。修平さんは、優しく私の頭を撫でた。

「……美保」

「はっ」

「なんで泣いていた？」

私は目を白黒させる。そ、そんなの、そんなの……！！

「き、気持ち良かったから、ですけど……？」

「そうではなくて」

さらりと私の髪を梳く、骨張った指先。

「さつき」

「え？ あ、あー」

すっかり忘れてた。

「あの、……その」

思わず赤面。

「うん？」

不思議そうな修平さんと目があって、思わず私は背を向けた。

今さら、今さらなんだけど！ カオ、直視できないよ！ 好きだって、わかってしまった。わかってしまったら、なんか、なんか……っ！ 一人で百面相してる私を背後から抱きしめ直して、修平さんは私の耳元で小さく言う。

その低めの、イイ声で。

「なにか、してしまっただろうか？」

きゅ、とその腕に力が入った。

「俺が、君を泣かせてしまうようなことを」

上から覗き込むようにしてくる修平さんの、その首のうしろに手を回す。

「違うんです……」

顔を直視できないから、目線はウロウロ。うう、顔真っ赤なんじゃないかな。

「私……修平さんのこと何も知らないなあって」

「俺のこと？」

「そうです」

良く考えたら、そうだ。

「好きな食べ物、休日の過ごし方、なにも、なあんにも」

修平さんは知ってくれてたのね。

私がコーヒーが好きなこと。多分、他にも……いろんな会話から、それを覚えていてくれた。たとえ「情報」としてだとしても、ちゃんと知って夫婦になってくれた。私は小さく続ける。

「学生のとき部活なにしてたんだろ、とか、どんな子供だったんだろ、とか」

普通は結婚する前に、そんな話するんじゃないかなあ。

「知ってるのは……本の趣味、くらいで」

修平さんは私の頬に触れる。

「十分だ。これから知ってもらえばそれで」

修平さんの優しい目に、私はきゅっと眉根を寄せた。

「それで、私」

その優しい目につられるように、私は口を開く。

「修平さんの過去に嫉妬しました」

「過去？」

「どんなデートしてたのかな、とか、そんな……ことですか……」

勢いで言ってしまったけれど、急激に襲ってくる羞恥。

「ああああの、忘れてください」

「いやだ」

「ええっなんで!？」

「何でもだ」

きゆう、とふたたび抱きしめられる身体。

(過去に嫉妬するなんて……人のことは言えないのに……)

修平さんが私をどう思っているにしろ、私はこの人に「元彼のスウェットを貸す」ってことまでしてしまってるわけで、うん。

「それから」

「え？」

「これは君のせいだ」

太ももに、そっと当てられた、大きくなっちゃってる、それ。

「……え、元気ですね？」

「無理はさせないから付き合ってくれ」

無理させない、って、多分それが無理。

私は降ってくる甘いキスに身体をまかせながら、そんなふうに考えて目を閉じた。

## 7 大事にされてる

大事にされてる。とても、大事にされてるのだろうと思う。そう思うと、胸がきゅうんと痛くなつて……好き、つてなっちゃう。

結婚して二ヶ月経った今も、その感覚は新鮮なまま続いている。——たとえば、いまだって。私はぼんやりと暗闇を見つめた。カーテンの向こうの暗さからいって、まだ朝方にもなっていないんじゃないかな。十二月なかばの、夜中と朝の間。ぶろろろ、と外を原付が走っていく音がした。横で寝ている……というか、私をぎゅうぎゅう抱きしめて寝ている修平さんの手は、私のお腹の上で、優しく重ねられていた。私が「お腹痛い」って、言ったから。

修平さんは生理中、驚くくらいに「性欲？ なんだそれ？」って雰囲気になる。普段、あんなに凄いのになあ。思い返すと私だけえつつくなるので、頭からそれは無理やり、追いやった。

昨日の夜、寝る前に「ちよっとお腹が痛い」って呟いたら、あの無愛想な目が心配そうに揺れて。『薬はあるのか？ 病院は？』

ワタワタとあまりに慌てるから、思わず笑ってしまう。出会ったばかりだとわからなかったレベルでの表情の変化だけけど、今ならわかる。本気で慌てる顔だった。

『大丈夫ですよ、あっためてたら治るんです』  
『温める?』

『はい、あ、でも手とかで大丈夫なんです』

お布団で手を当ててたら少しマシで、とそう言うのと修平さんはひよいと私を持ち上げた。

『俺の手のほうが温かい』

ベッドに寝転ばされて、布団を掛けられて、同じ布団の中、うしろ向きに抱きしめられて——お腹にそっと手を添えられた。

『多少は違うか?』

『……はい』

私はそれより、なんだかじわじわと心があったかくて、その手に自分の手を重ねる。

『ありがとうございます』

『まったく構わないが、こんな冷たい手では温まるものも温まらないだろう』

耳元でそう言う修平さん。お腹、痛いんだけど、きゆうんとして……気がつく。

『……あの』

『すまん』

あっさりと謝られた。

『ほとんど条件「反射だ』

ちょうどお尻あたりで感じてたのは、修平さんの、おっきくなった、そのー、あれです。

『気にするな』

私から、少し腰を離す修平さんだけど、手はきっちりお腹の上で。変な姿勢じゃないのかな。

『眠れそうか?』

優しい声で、修平さん。我慢して、くれてるのかな。なんだか不思議だった。

変な話、だけれど。今まで付き合ってた男の人って、こういうとき「口でして」とか割と言うことが多くて。……遠慮してる?』

『あの』

『なんだ』

『口でしましょうか』

それ、と振り向きかけて、ぎゅっと抱きしめられて動けなくなる。

『修平さん?』

『気を遣わせてすまない』

『え、あ、そうじゃなくて』

『気にしなくていい……寝よう。体調が良くないのだから』

そうっと、こめかみにキスが降ってくる。それからまた、修平さんの大きな手のひらが、お腹の上に重ね直される。

彼のほうを向いて、眠りたかった。その胸に顔を埋めて、ぎゅっと抱きしめられて、眠りたい。けど、手があったかくて、ふわふわしてきて——ぼんやりしながら、ふと、気になっていたことを聞いてみた。



『修平さんって』

なんだ？ つて、優しく聞き返してくれる声に、安心感でまた蕩けそう。

『なんで宮沢賢治が好きなんですか？』

修平さんは『なぜだろうな』と苦笑した。

『あえて言うなら……美保と同じ、なのかもしれない』

私と同じ？ 首を傾げる私に、修平さんは言う。

『美保がよだかと自分を重ねたように。……俺はジョバンニと俺を、重ねたのかもしれない』

少し驚いて、軽く振り向いた。

——ジョバンニと、修平さん？ 重ならない。クラスで孤立して、いじめられていたジョバンニ

と、昔から強くて堂々としていそうな修平さん。

『中学の頃、一時期……部活で孤立していた時期があつて』

私は息を呑んだ。

『顧問の先生と、先輩の態度があまりに横柄で、異議をとなえたのがきつかけだったかな。サッカー

部だったのだが、レギュラーも外されて、毎日外周しかさせてもらえなかった』

修平さんは苦笑して、続ける。

『さすがに応えたな、あれは……その頃に、たまたま「銀河鉄道の夜」を読んで、それで——はまった、というか』

しつくりきたんだな、と修平さんが笑う。私は修平さんの手に、自分の手を重ねた。

『結局、先輩たちが卒業したら全部が元に戻った。拍子抜けするくらいに……だから、ほんの数ヶ月だったのだが』

穏やかな声で、修平さんは言う。私は小さく頷いた。

——そっか。案外と、もしかしたら、もしかしたら……私たちは、似た者同士なのかも、しれない。話してくれて、……ありがとうございます』

重ねた手は優しく私のお腹を撫でた。痛みも和らいできて、あつたかいし、……で、気がつけばスヤスヤと眠っていた。

そして目が覚めて——まだ、その手が私のお腹にあることに気がついて、少し感動すらしてる。

たまたま、かな？ 眠ったままの姿勢？ それとも、気にしてくれてる？ 私は、くると寝返りを打って修平さんのほうを見る。コワモテで、無愛想で、でも整ったお顔は、今はすやすや夢の中。どんな夢、見てるのかな。私の夢とかだったらしいのにな、なんて思う。

「……おやすみなさい」

もういちど襲われた睡魔に、私は身体をそっと修平さんに寄せて甘えるみたいに眠る。

それから、どれくらい経っただろう。ぱちりと目を覚ますと、修平さんの姿はなかった。

「起きたか」

寢室をひよいと覗いてくる修平さんは、仕事用のシャツにスラックス。

「朝飯、できてるぞ」

「は、い……ん、ええっ？」

私は慌てて目覚まし時計を見る。もうこんな時間!

「ご、ごめんなさい朝ごはん」

「いや、体調が悪いんだから無理することはない」

「もう大丈夫ですよー、ほら」

何がほら、なのかわからないけれど、とりあえずガッツポーズをしてみると、修平さんは重々しく頷いた。うむ、って感じで。

「それならば何よりだ……いやすまない、今日はバイトが休みだと言っていたから。もう少し眠るかと、アラームを切ってしまっていた」

「え、あ、ごめんなさい」

「いや、俺の勝手だ」

修平さんはさらりと私の髪を撫でた。

「おはよう」

「おはよう、ごさいます」

修平さんは目を細めた。ほんの少し。これは、少し安心したときの、そんな顔。

「昨日より顔色がいい」

「そう、でしょうか」

私はそう答えながら——また心がほわりと温かくなるのを感じていた。

## 8 月の夢 (修平視点)

こんな夢を見た——夏目漱石なつめ そうせきを気取る訳ではないけれど。

透明な紺色の空に、ぼかりと金の月が浮かんでいる。その下を、俺と美保が歩いている。手を繋いで。俺も美保も、和服を着て、舗装されていない土の道を、ざりざりと並んで歩く。林の間の道のようにだった。両脇には木々が並ぶ。地面には、恐ろしいほどに白百合しろゆかりが咲き誇り、その香りで息苦しいくらいだった。光源は、月明かりだけ。りいりいと虫がなっていた。

「なぜ俺と添おうと思ったのですか」

なぜか敬語の俺。——ここが夢の中だということを、なんとなく、俺はわかっている。

美保は微笑む。

「お父様が、あなたに嫁よめげと言ったからです」

夢の中で、俺はぐっと押し黙って……それは予想していたことで、わかっていたことだった。そして、それでも構わないと俺は思う。美保が俺のものになるのならそれでいい、と。そう思った。

百合ゆかりが、風で揺れた。むせ返る百合ゆかりの香り。

俺を見上げて微笑む美保を、そっと抱きしめる。美保はくすぐったそうに身をよじった。その白い首筋に舌を這はわせる。はあ、と上がる息に、身体の奥がズクリと疼うずいた。美保を抱き抱えるよう